

福竜丸だより



都立・第五福竜丸展示館 ニューズ

発行 (財) 第五福竜丸平和協会
〒136-0081 東京都江東区 夢の島3-2
都立第五福竜丸展示館内
電話 03-3521-8494

「過ち」は繰り返されていないか

澤藤 統一郎

私は、日本国憲法が存在していたから法律家となった。

本来法は保守的な存在である。社会革新の運動は現体制が作った法の壁に衝突するのが当たり前。世の中をより良くしようという運動の「スローガン」は、「より良き法に変えよ、憲法を改正せよ」でなくてはならない。「頭の固い法律家など、社会改革に邪魔になるだけ」なのだ。ところが、私の国の特殊な歴史的事情から、社会の現実には数歩先を行く先進的な憲法をもつ幸運に恵まれた。とりわけ、戦争のない平和な世の中を作ろうとする課題における平和憲法の役割は大きい。

ならば、法律家は一国の最高法規である憲法を武器として、よりよい社会を作る運動に寄与しうる、とりわけ平和の問題においてそれなりの役割が果たせるのではないか。漠然とはあるが、私がそう考えて弁護士をめざした三〇年前から基本的に状況の変化はない。ところが、最近どうも雲行きが怪しい。最高法規である憲法の理念を押しつぶす立法の策動が次々と進展してい

る。社会の「進歩」どころではない。まずガイドライン関連法案である。

その中核である周辺事態法は、これまでの「専守防衛」の原則を超えて、わが国の軍隊(自衛隊)の日本領域外での軍事活動に道を開こうとするものである。周辺事態という、意味曖昧だがはっきりしていることは日本が武力攻撃を受けていない状況において、アメリカの軍事行動の「後方地域支援」を行うという。まさしく軍事的にアメリカと一体化した「戦争協力法」にほかならない。しかも、あわせて重要なこととして、法は、地方自治体や民間にも「必要な協力」を依頼できると明記している。国家総動員法の現代版となっているのだ。これほどの法律が、国を揺るがすほどの大事とはならず成立してしまっただけだ。

続いて、「日の丸・君が代」法案の唐突な浮上である。周知のとおり、日の丸・君が代は戦前の天皇主権・軍国主義・植民地主義とあまりに深く結びついた歴史をもつ。現行憲法は、その深刻な反省を出発点としているが、日本

社会の実態は、多くの旧憲法的な残リカスを引きずっている。憲法施行後五〇年を経た今日もなお、この反省の不徹底が指摘されている。日の丸・君が代は、そのような反憲法的な、残リカスの象徴にしかなり得ない。

また、さすがに法案には国旗・国歌を強制する規定はない。しかし、法制化のねらいが、「教育現場での混乱」を解消して、日の丸・君が代の実施を徹底することにあることは明らかで、教員に対する職務命令の根拠とされることが予想される。また、右翼暴力や社会的圧力という事実上の強制が蔓延するきっかけとなることも心配しなければならぬ。

憲法の恒久平和主義は、世界に向けての、とりわけアジアに対する非戦のメッセージである。第二次大戦における被侵略国の民衆は、ガイドライン関連法と「日の丸・君が代」法案、さらには憲法調査会法をどのようなメッセージとして受け止めるであろうか。法律家だけで何ができると考えられる事態ではない。戦争犠牲者への「過ちは繰り返しません」という誓約の実行が国民的規模で迫られていると思う。

(日本民主法律家協会事務局長・弁護士・本協会監事)

アメリカから高校生―船を見つめ討論会

七月十六日、日米文化センターの招きで来日中のアメリカの高校生が来館、熱心に船を見つめ討論、「ヒキニ事件」を学びました。ワシントンD.C.のシドウェル・ハイスクールほか十名の高校生たちで、数週間ホームステイで日本の学生と交流しつつ、東京、京都、沖縄など各地を訪問、広島・長崎も訪れ被爆者と交流します。展示館では、案内した日本キリスト教大学の学生、通訳ボランティアの大学生と「核と人類」などのテーマで活発にディスカッション



東京の高校生平和ゼミナールの見学

七月十九日朝、さつそうとした自転車の一群が展示館前から広島へ、青森県六ヶ所村へ出発しました。「ピース・サイクル99全国ネットワーク」の東京東部の青年たちで、今年も第五福竜丸がスタート地のひとつ。各地からリレーで引き継ぎ合流して、何百万回のペダルを踏んで、八月五日広島へ、七月三十一日六ヶ所村に到着します。

「憲法九条を世界に、基地と核・原発のない社会を、自然と人間の共生を、アジアの人々との連帯を、人権を確立し平和で希望ある社会を」などの願いをかかげ、一九八六年以来つづけられていて、毎年千名をこえる青年が運動に参加。沿道各地の基地、原発を結び、運動する地元の人々と交流し、自治体に非核都市宣言の推進と平和行政の促進を申し入れ、ピースメッセージを交歓するなど行動は多彩。出発式では「きなくさい雰囲気が高い、いつか来た道

プレゼントしました。高校生平和ゼミナールも七月二十日、東京の高校生平和ゼミナールの七十名余が来館、大石又七氏の話を甲板上で聞いて学習と討論の時間を過ごしました。

への動きが厳しいいま、働く青年の運動はとりわけ重大」と決意をみながら、「人肌の平和をペダルにのせて、苦しくてもさわやかに沿道に手をふって」と第五福竜丸にも笑顔でピースサインを送ってスタートしました。

第五福竜丸の「海図」展示

いま展示館では、展示物の充実と展示パネルの一新にむけ、企画の立案と原稿執筆など準備作業が精力的に進められています。定例の「六月展示替」では、「第五福竜丸の『海図』」をはじめ新しい展示をいくつか行ないました。「海図」は先に紹介した三枚の「海図」を中心に、その発見から展示までのいきさつ、船と海図がたどらされた数奇な運命、危険海域の通告時期と実際の表示をめぐる疑問と推定、押収された「海図」の行方、見崎吉男漁労長の新しい証言など、詳細な解説を最近の報

「マグロ塚」プレート設置へ

大石又七氏が進めてきた築地魚市場にマグロ塚をの運動は、この程まず趣旨を刻んだ「プレート」が、魚市場正面玄関前に設置されることになりました。八月一日午後一時設置の予定です。「願ひ実現の一步です」と大石又七氏によるこびと一層の活動を誓っています。

道をもとに作成展示しました。三浦半島や紀伊半島など第七事代丸―第五福竜丸にゆかりの深い海域の「海図」も見つめられているとさまざまな思いが浮かんでくることも、なにか問い掛けられるような思いにとらわれる見飽きない「海図」です。

また、「第五福竜丸のエンジン」についても、「夢の島への運動」の現状、修理作業の現実などを、二〇〇〇年春までに一般公開をの期待をこめて補強しました。最近あいついでそれぞれ地元建設された「引き揚げの地」「建造の地」の碑の写真も展示されました。第五福竜丸保存運動の展示物の充実の努力のひとつとして、関連する現行展示物の二階部分への統合や、スポットライトをつけ見やすくするなどの変更も行ないました。

一段とスピードを速める “一億総動員”

あんな歴史は繰り返したくない

服部 学

敗戦のとき私は東大物理の一年生だった。太平洋戦争の末期には、連日の大空襲で私も被災し、反戦思想(?)がチョッピリ頭をもたげて、こっそりと友人と東大単独講和論なる珍妙な話をしたことを覚えてる。終戦の日の午後、ドラム缶にお湯を沸かして台湾人の若い人と二人で久しぶりに露天風呂に入ったのは懐かしい思い出である。しかしどう考えても、私を含めて若い者が知らず知らずの内にすっかり軍国主義教育に染まっていたことは否定しようがない。どうも戦争中のきびしい言論統制よりも、戦前の十年以上も前から少くも思想統制、マインド・コントロールが強まり、軍国主義少年がそだてられていったような気がする。

五・一五事件、二・二六事件など(若い方には馴染みがないとは思いますが、総理大臣が軍のクーデターで暗殺されたりしたのである)が起こる度にその傾向は強まっていた。もっとも高校生の頃に得意になって歌った「汨羅(ベキラ、楚の屈原の投身で名高い)の淵に浪騒ぎ……」という歌は二・二六事件の犯人たちの思想・信条をある意味で謳歌するものであった。憲兵隊や警察の権力は日増しに強くなっていった。特にケンペイタイという言葉はそれだけで実に恐ろしかった。泣く子も黙るといふ言葉通りだった。やがて政党は自分の意見を述べられなくなつて解散し、大政翼賛会に統合された。

オウム事件は二・二六事件とは目的も方法も異なるのだから、当局はこの事件に対する国民の感

情を利用して破防法を強化しようとしている。その一つが通信傍受法つまり盗聴法である。憲法第二条の二には「検閲は、これをしてはならない。通信の秘密は、これを侵してはならない」とはつきりと記されている。「これからあなた方の電話を傍受します」と断るのならば、警察手帳を見せてから持ち物の検査をするようなもので、ある程度は仕方がないかなというふうな気もするが、そうではない。まさに盗聴である。もっとも傍受しなすと言われて電話を続ける人もいないだろうが。年寄りか半生を振り返ってみると「この道はいつか来た道」が繰り返されるようになっている。あんな歴史は繰り返したくない。

特に今度の国会はひどかった。新ガイドライン、盗聴法、日の丸・君が代の法制化、と一億総動員のスピードが一段と速まっている。不審船の進入、テポドンが発射準備等を利用した自衛隊の強化も進んでいる。一億総背番号制も単に便宜上のためではないのだそうである。リストラ(年寄りには首切りと言った方がわかりやすい)



第五福竜丸展示館と演劇「漁港」から

永井 淳

立正大学の藤田ゼミ・その他の有志学生で、第五福竜丸展示館を訪れた。下から見上げると船は大きく見えたが、乗ると二三名が乗ると思えないほど小さい。この船が、太平洋に乗り出し、水爆で被曝した。

展示館の展示は、写真や資料といった記録から、ありのままの被曝の実相を浮き彫りにする。その範囲は、第五福竜丸にとどまらず、南太平洋諸島の実験場近くの島民の被曝と健康被害、世界の核実験の状況にもおよぶ。

ではじめて知った。第五福竜丸乗組員の、資料だけでは見えにくい側面を、演劇という形で表現したのが、劇団民藝の「漁港」である。こちらも藤田ゼミで観た。

第五福竜丸の乗組員や、その周辺の人びとの姿を描くことで、彼らにも普通の生活があったことを表現する。そのありふれた生活が、一回の水爆実験により、歯車をきまかせていく。そこに数字や闘病記録だけではないもうひとつの真実を、演劇という形で見ることもできる。

夢も、希望もある、恋愛だつてする、そんな人びとの人生。水爆実験が夢も、希望も、そしてまともな人生をも奪っていく。二三名が被曝し一名死亡という数字だけで語れないことが、そこにはあつ

た。数字が悲劇の大きさを表現するように、「漁港」は悲劇がなぜ悲劇なのかを表現していた。

ひとは、ひとそれぞれの幸せを求めて行動している。自分の幸せを実現することが、生きていくということなのだろう。その幸せを実現する望みを、いわれなく失なわせることが、どれだけ悲しい事か。むごい事か。そういう事を、水爆実験は強制した。

核兵器の被害を、人間はコントロールできない。それは全世界的に、長期にわたつてつづく。事実、第五福竜丸の海図には、アメリカ側が事前に指定した「危険水域」が書き込まれていた。もちろん被曝時、第五福竜丸はその外側にいた。しかし、その水爆のもたらした被害は、第五福竜丸に死の灰を降らせ、日本に放射能の雨を降らせた。そしてマーシャル諸島の住民たちは四〇年以上たつても避難生活をつづけている。

そして、その被曝の影響は、死亡しなくとも、被曝者の体内をむしばみつづける。いや、その影響はその子孫に現れることもある。「漁港」の脚本家は、被曝者の妻に叫ばせた。「わたし、産まない」。

そのあとの言葉のいたいたしさが、ひうひとつの被害を示している。

アインシュタイン等の科学者は、第五福竜丸の被曝のあと、こう声明した。「水爆による戦争は、人類を絶滅させる可能性が十分にある」「争いを忘れることができぬという理由で、そのかわりに死を選んでよいでしょうか」。しかし、人間は、まだ争いを忘れられていない。

第五福竜丸は、木造の小さな船である。しかし、それは、核兵器とそれがもたらす大きな傷跡を示している。核兵器の使用が、ひとが生きていくことに、どれだけ肉体的、精神的な障害になるかを示している。

こういう事を、毎日考えているわけにはいかないだろう。ときどき、どこかで思い出せばいいと思う。自分の人生を、核兵器で傷つけられないために。そして他人の人生も。

第五福竜丸関係のふたつのことから、こんなことを考えてみた。
(立正大学学生)